

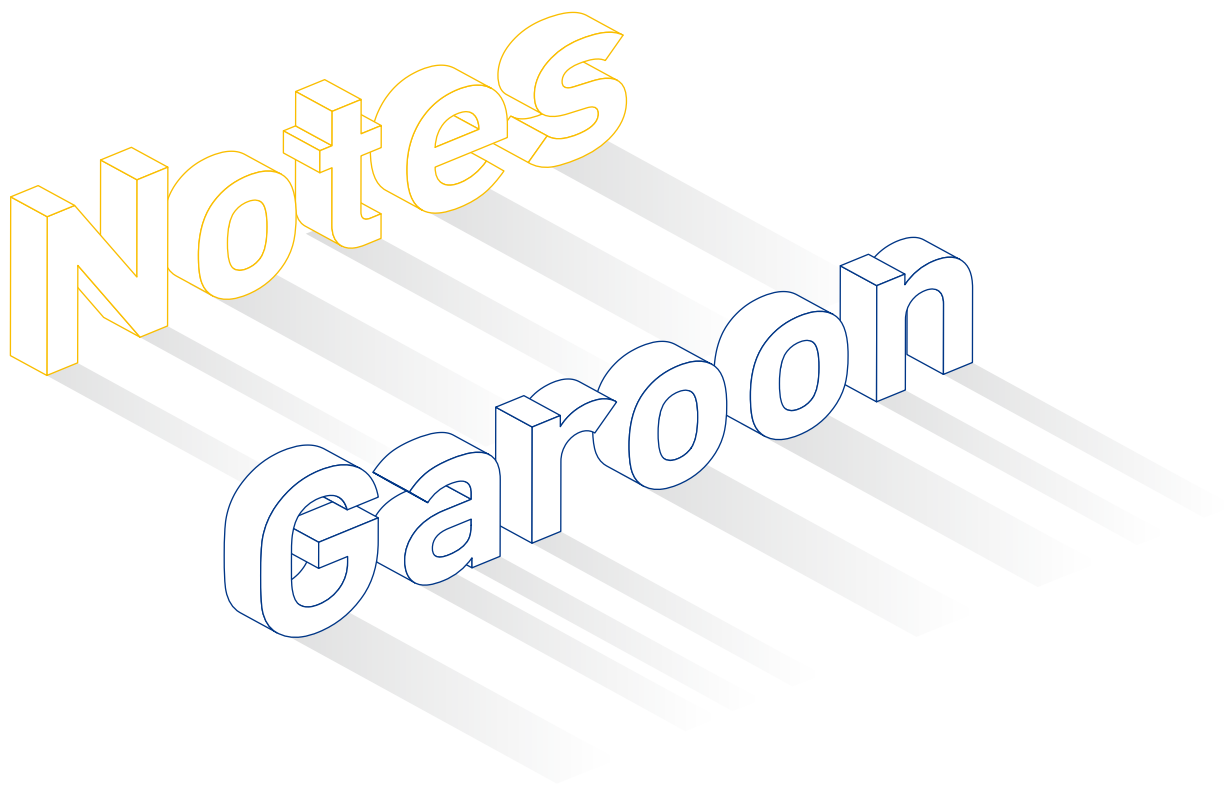
やる？ やらない？

Notes

からの

移行の
境界線





Contents

Part 1 移行決定前プロセス

Notesからの移行の是非..... 4

Notesからの移行を阻む勢力とそのワケ 6

業務部門に対するアプローチ 8

経営層に対するアプローチ..... 10

情報システム部門に対するアプローチ..... 12

経営企画部門に対するアプローチ 16

移行を検討している自分自身に対するアプローチ..... 18

移行に向けたレベルを知る 20

データ移行のプロセス大研究..... 24

Part 2 移行事例のご紹介

事例企業 ① サンコール株式会社様 27

事例企業 ② 中野製薬株式会社様 33

事例企業 ③ 東洋ハイテック株式会社様 38

Notesからの移行の是非

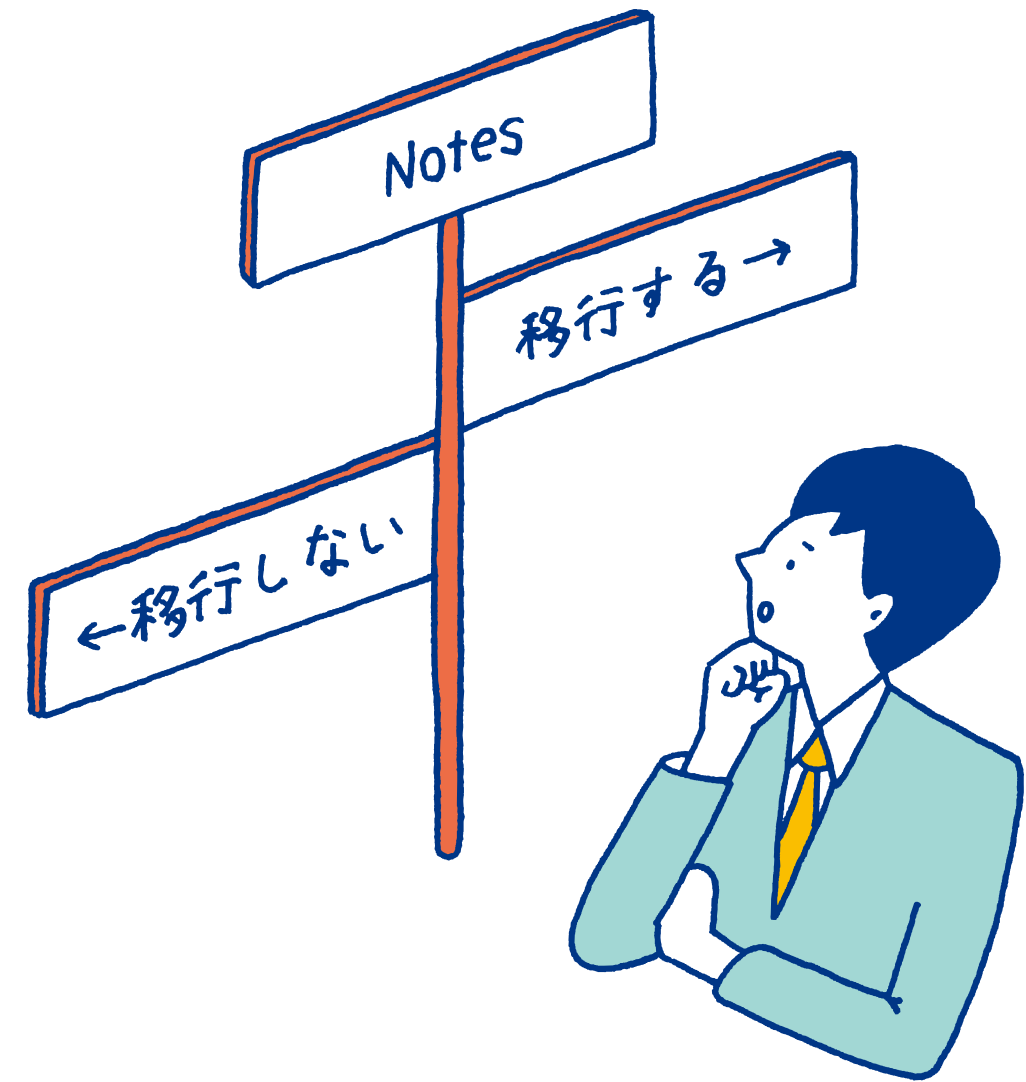
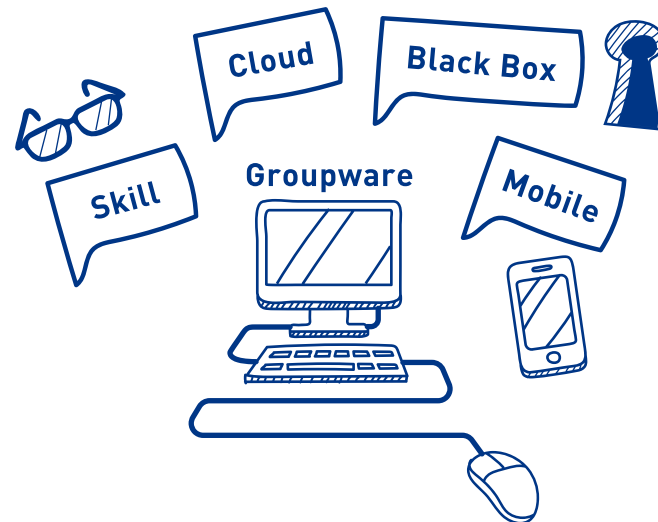
1989年に登場した「Lotus Notes/Domino」は、クライアントサーバー型のグループウェアとして企業のコミュニケーション基盤を長年支えてきました。音声や画像をはじめ、非定形情報もそのまま保存可能なNotes DBを中心に、認証基盤やWebサーバー機能などが備わった開発プラットフォームとしての顔を持っているソリューションです。「Lotus Domino Designer」と呼ばれる開発環境を用いることで、企業独自のカスタムアプリケーションが開発できるようになっています。

しかし、今ではクラウド・コンピューティングをベースにした情報共有基盤が広く普及し、一般的にクライアントサーバー型のアプリケーションは敬遠されがちです。特に、「Notes」は専用の開発環境とスキルが必要になるため、継続して利用するには専門の技術者を確保する必要があります。誰でも扱える仕組みではないため、最近では技術者の確保が困難になりつつあるのが現実です。

また、数多くのカスタムアプリケーションによってシステムが硬直化し、ビジネスシーンの変化に対する柔軟な対応が困難な場面も見受けられます。部門ごとに独自のアプリケーションが作られたことでブラックボックス化してしまい、情報システム部門として統制環境を整備するのが難しいという課題も顕在化しています。バージョンアップのライセンスにも多額の費用がかかるなど、中長期的な視点でみればプラットフォームとしての移行期に差し掛かっているといっても過言ではありません。

同時に、スマートフォンやタブレットなど新たなデバイスをビジネスシーンで利用する機会が増える中で、あらゆるデバイスから柔軟にアクセスできる環境作りにも考慮する必要があります。社外からのアクセスも含めた使いやすさを考えると、今ではWebアプリケーションに対応した仕組みが選択されるのが一般的。様々な機能が備わったオールインワンタイプのWebアプリケーションであれば、あらゆるデバイスで活用できるだけでなく、クライアントに環境をインストールすることなしにアプリケーションの集中管理が可能になります。

ビジネスの変化が激しい今の時代に対応していくためにも、新たな環境へ移行するための境界線を越えていく必要があるのです。



この境界線を越えるために欠かせないのが、既存のNotes環境を再現しながら新たな環境へ柔軟に移行できる使い勝手のよい基盤です。その1つの選択肢として挙げられるのが、サイボウズが提供する「サイボウズ ガルーン(以下、ガルーン)」です。ほぼすべての操作がGUI上で実現されており、直感的なUIによって誰にでも簡単に日常業務を支援するツールとして活用できます。「Notes」とは異なり、「ガルーン」はオールインワンのパッケージ製品。業務に必要な機能が豊富に備わっており、専門の技術者を確保する必要がありません。

また、スマートフォンをはじめとしたスマートデバイスにも対応しており、メールやスケジュール共有、掲示板、ワークフローなどの機能が社外からでも利用できるようになります。長年運用してきた業務を継続させながら、社外からでも情報共有が可能になるなど、新たな付加価値を生み出すことができるようになるのです。

「Notes」を運用保守するための時間とコストを削減し、システム戦略の立案など本来取り組むべき情報システム部門へと生まれ変わる、今まさにその境界線に立っているのです。

Notesからの移行を阻む勢力とそのワケ

ビジネス環境の変化に伴って
「Notes」の運用を維持することが難しくなりつつある今、
新たな環境に移行するための境界線を越えていくチャンスが
以前に比べて増えていることは間違いありません。

しかし現実には、いまだにプラットフォーム移行に
着手できていない方も少なくないのです。
なぜ新たな環境へ移行することに踏み出せないのでしょうか。
それは、ご自身も含めた社内のステークホルダーが大きな原因の1つ。
一歩踏み出すための境界線に、
各ステークホルダーの思惑が見え隠れしているのです。



境界線を越えて移行に着手するためには、
各ステークホルダーが抱える思いに応えるための
メリットを打ち出していくことが重要です。
それぞれが抱える課題への解決策を提示することで、
新たな環境への第一歩を踏み出すことができます。
また、最後に越えなければならない境界線として、
移行を検討している自分自身を
納得させる材料をそろえておく必要があります。

業務部門に対するアプローチ



業務部門

業務基盤として
「Notes」を長年利用しており、
既存の仕組みに慣れている。
できれば**業務フローや**
使い勝手を変えたくない。



既存のフローを極力変えることのない、
現場へのインパクトを最小限に抑える
仕組みを選択すべき。
スマートフォンなどからでも
アクセスできるような仕組みを選択すれば、
社外にいても簡単にスケジュール共有でき、
必要な情報に手軽に
アクセスできるようになります。



Data Base



現場では、メールやスケジューラー、申請業務のワークフローなど「Notes」が備えている様々な機能を利用して日常業務を遂行しています。現場に応じた様々なカスタマイズが長年にわたって行われており、部分最適ではあるものの、現場に適した仕組みとなっていることでしょう。長年使い慣れた仕組みでうまく現場に適用できているからこそ、あえて変更したいとは考えていないものです。そこで業務部門に対しては、既存の運用を大きく変更することなく業務フローの再現性を高めながら、これまでとは違う新たなメリットを提示してあげるべきです。

サイボウズでは、「Notes」が持つメールや掲示板、スケジュールなどの基本機能は「ガルーン」に移行できます。また、部署ごとにカスタマイズされた複雑なDBやアプリは、ビジネスアプリ作成プラットフォームの「kintone」に移行することが可能です。

「ガルーン」を基盤に採用すれば、これまで難しかったモバイルアプリケーションとの連携が可能となり、外出先からでもメールやスケジュール、社内の業務アプリに容易にアクセスできます。社内に戻ることなく情報共有が可能となるため、業務部門の働き方を変革するきっかけにも、新たな価値を生み出す情報共有基盤に刷新することができます。(下図参照)

「ガルーン」であれば全社員の予定がひとつのスケジュール機能で把握でき、組織横断型のプロジェクトであってもスケジュール調整が容易になります。また、あらゆる情報を横断的に検索できるようになるなど、これまで以上に使い勝手の良いインフラを提供することが可能です。

スマートフォン・タブレット端末からも「ガルーン」をご利用いただけます



スマートフォン専用アプリケーション「サイボウズ KUNAI」もご用意
データシンク型なので、オフラインでも利用可能です。



経営層に対するアプローチ



経営層

コミュニケーション基盤を刷新することによる、
投資対効果が見えづらい。
個人的には問題なく使えており、刷新することに**納得感がない。**



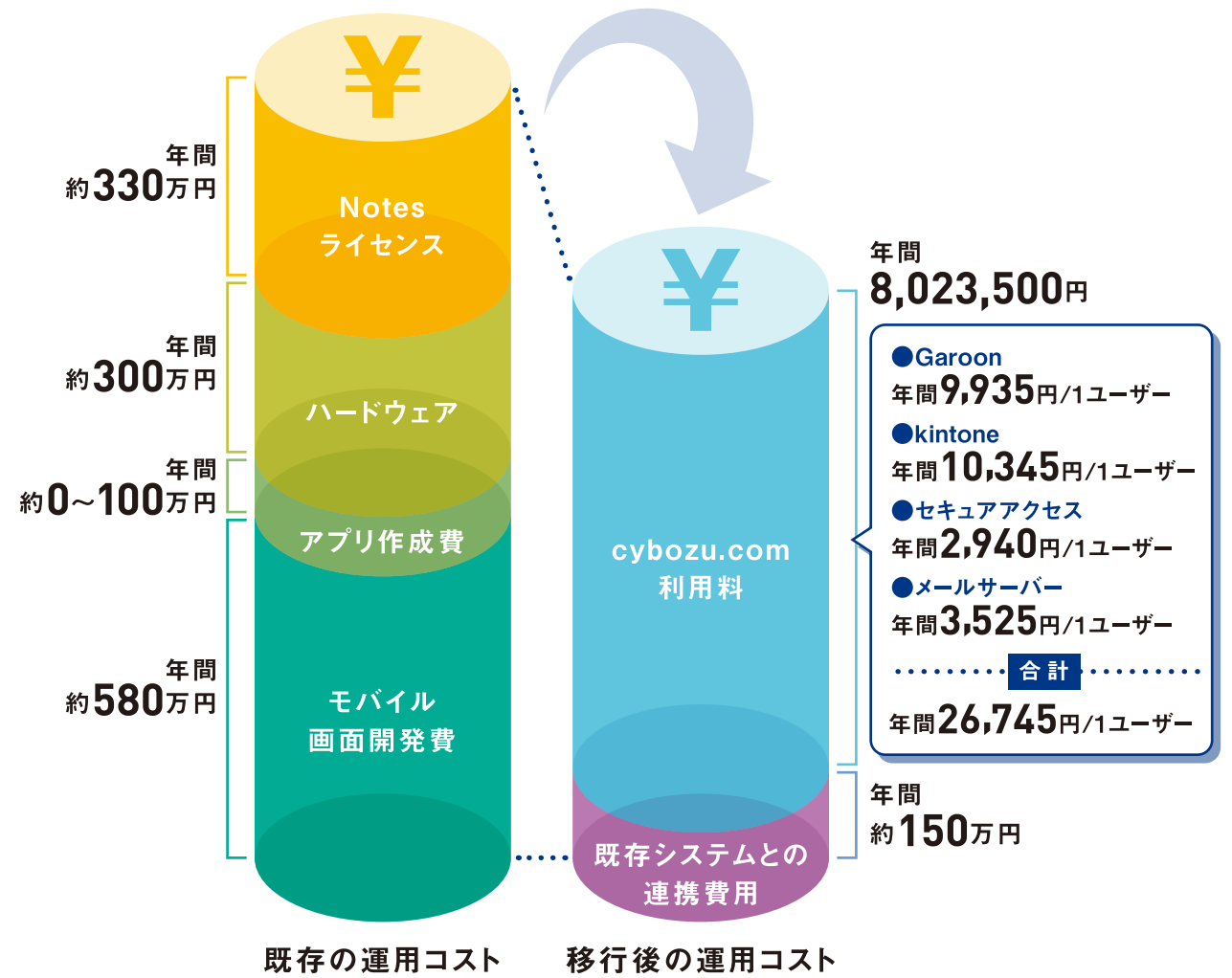
移行にかかるコストをおさえながら、開発費や保守費、バージョンアップ費用で**大きくコスト削減につながるオールインワンパッケージ**がお勧め。社外からでも利用できる環境を整備することで**現場の生産性向上**にも役立ちます。情報が集まりやすくなることで**経営判断が迅速になり、自社の競争力強化**にもつながります。



経営層からすれば、「Notes」で構築されたコミュニケーション基盤を刷新することが経営課題の解決につながると認識していないケースが多く見受けられます。ただし、刷新による効果が大きなものであれば話は変わってきます。当然ですが、経営層が普段から意識しているのは、投資に対する効果、いわゆるROIです。既存の環境と比べた場合の投資対効果を明確に示したうえで、基盤の刷新が経営課題の解決に大きく貢献することをアピールしていく必要があります。

「ガルーン」であれば、移行に伴うアセスメントから移行計画の立案、業務プロセス改善提案、実際の移行作業、移行後の運用サポートに至るまで各プロセスを強力にフォローすることで、移行にかかる負担を軽減し、最小限のコストで最大の効果を発揮するための支援を行うことができます。また、ワークスタイルの変革によって得られる生産性向上やコミュニケーションの円滑化に伴う社内活性化など新たな価値を提供することで、経営課題の解決につながります。

300ユーザーの場合の例



情報システム部門に対するアプローチ



情報システム部門

刷新することが必要なのは
理解できるが、本当に移行できるのか
イメージできない。
あえてプロジェクトを
無理に立ち上げることはしたくない。



移行先の製品の特性を理解することで、
移行イメージが具体的に
安心感につながります。
サイボウズであれば、
**「ガルーン」と「kintone」を
組み合わせる**ことで実現。
個別に作られた
カスタムアプリケーションの
移行も可能に。



長年「Notes」を運用してきた情報システム部門にとって、運用管理における課題や仕様変更に伴うコスト負担などの課題は以前から顕在化しているはずで、できれば新たな環境に移行したいと考えている方も多いことでしょう。しかし、具体的な検討プロセスに関わっていないこともあり、そもそも「Notes」の特性やそれを補完するための製品がイメージできていないものです。それゆえ、移行に関して不安に感じてしまう方も少なくありません。コミュニケーション基盤を移行するとなれば全社あげての大規模なプロジェクトになるため、

情報システム部門の人的リソースが十分確保できるのか、プロジェクトをうまく遂行できるのかといったことも心配の種となってきます。
そこで、まずは「ガルーン」では何ができるのか、現場に最適化されたカスタムアプリケーションによる業務を別のツールで再現できるのかといった、具体的な製品の特性をきちんと理解してもらう必要があります。ITについては十分理解しているからこそ、移行する製品についての具体的なイメージを提示することが必要なのです。

●ガルーンのコネプト

「ガルーン」はオールインワンの“パッケージ”です。確かに「Notes」は作りこみを行えば現場に合わせた環境が作り出せますが、結果としてシステムの硬直化を招き、開発、運用保守のために多くの時間とコストをかけなければならないケースも少なくありません。

潤沢な予算と人的リソースが確保しにくい情報システム部門にとってみれば、パッケージへの刷新が課題解消の第一歩となることでしょう。

	サイボウズ ガルーン	
コンセプト	パッケージグループウェア	チームでの利用を想定したパッケージ
サービス提供形態	Web型	多様な利用環境を実現しやすい
カスタマイズ	設定によるカスタマイズ	開発工数(=コスト)が少ない
導入作業	パッケージ + 初期設定	必要な工数が少ない
管理対象	サーバーで一元管理	メンテナンスがしやすい
管理者のスキル	一般的なシステム管理程度	教育コストを削減しやすい



情報システム部門に対するアプローチ 《》

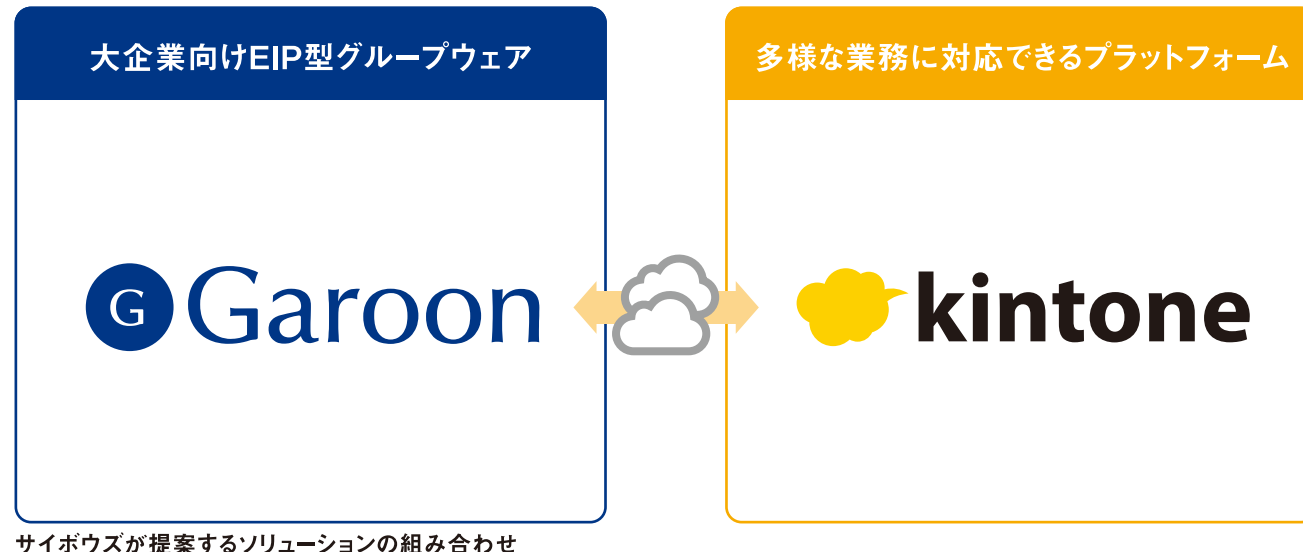
● 具体的な製品群の組み合わせ

「Notes」の魅力は、現場のあらゆる業務に適用できる柔軟性の高さであり、それは開発プラットフォームとしての一面を持ち合わせているからこそ。ただし、自社の業務に応じたカスタマイズが可能なぶん、属人化によるシステムの硬直化を招き、ビジネスシーンの変化に追随するための柔軟性を犠牲にせざるを得ません。システムがブラックボックス化することで、どこでどんなシステムが動いているのかを把握することも難しいはずです。

そこでサイボウズが提案するのが、メールや掲示板、スケジューラーなど標準機能は「ガルーン」を用い、たとえば複雑なフローを伴う承認申請の仕

組みなど、標準的なパッケージでは実装できない機能については異なるソリューションで構築するといった、複数の仕組みを柔軟に組み合わせるものです。サイボウズの場合、「kintone」を「ガルーン」と組み合わせて現状の仕組みを再現するという提案です。パッケージの良さを失うことなく自社で簡単に業務アプリケーションが作成できるため、大規模なプロジェクトに起こりやすいデスマーチを回避することにもつながります。

なお、これらの組み合わせでも実装できないものがあれば、「ガルーン」本体を有償で個別カスタマイズするという選択肢もあります。



Column 陥りやすい罠は“機能の再現”に固執すること

情報システム部門として陥りやすいのが、「現状の機能がきちんと再現できるかどうか」に固執してしまうことです。システム移行を行う際には、現状活用している機能や画面、デザインなどに目を向けがちですが、本来であればその機能に紐づいた業務が存在しており、その業務が混乱なく行えるかどうか重要です。カスタムアプリケーションによって複雑な機能が実装されがちな「Notes」ですが、機能ばかりに固執することなく業務の再現性を意識すべきです。システムを扱う情報

システム部門だからこそ、陥りやすい落とし穴なのです。実際のデータでは、Notesからの移行を行う前の検討段階で半数以上の方が「既存機能の再現を重視する」と回答していますが、移行に成功した企業では「ユーザーが使いやすいかどうか」を重視した方が7割を超えており、機能の再現にこだわったのはわずか28.57%。データからも明らかのように、既存機能を再現することよりも、ユーザーに使いやすい仕組みを提供することが成功の近道といえるのです。

「Notes」からの移行を検討しているユーザー

「Notes」からの移行に成功したユーザー

既存機能の
再現を重視する
57.14%

既存データの
引継ぎ
57.14%

既存機能の
再現を重視する
28.57%

ユーザーが
使いやすいか
どうか
71.43%

※出典:アイティメディア「グループウェア利用調査」結果

経営企画部門に対するアプローチ 《 》

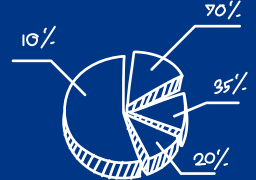


経営企画部門

「Notes」を刷新することに対して積極的に取り組む理由がない。
メリットを感じない。
経営企画の業務に直接役立つことはあるのか。



ワークスタイル変革の起爆剤となり、生産性向上など経営課題の解決に直結します。
分析に必要なデータを抽出しやすくなります。



経営戦略に対する具体的な実行計画を立案する経営企画部門にとって、コミュニケーション基盤であるグループウェアについて意識する機会はありません。コミュニケーションに関連した経営課題が具体的に示されていない限り、「Notes」の刷新を積極的に検討することはありません。システム刷新が経営企画部門のメリットにつながると考えていないのです。しかし、コミュニケーション基盤を刷新することは、経営企画部門に多くの福音をもたらします。そのことをしっかりとアピールするべきです。

コミュニケーション基盤を刷新することで、移動中にも必要な情報にアクセスできるようになるだけでなく、緊密な情報共有をどこからでも行うことができるようになります。それぞれ働く人が置かれている環境に応じて働き方が選択できるようになり、結果としてワークスタイルを変革するための大きな起爆剤となるだけでなく、生産性向上や効率化など、経営課題に直結する解決策を提示することも可能です。また、「kintone」を活用することで、

経営戦略を立案する際に欠かせない様々なデータ抽出などが従来よりも円滑に行えます。必要な情報が得やすくなることで、経営層に向けた提案の幅もきっと広がるはず。「Notes」からの移行が、経営企画部門としての活動の幅を広げるきっかけになるのです。

「Notes」を使い続けることは、かえって経営的なリスクを高める可能性も秘めています。オンプレミス型で導入している限り、利用しているソフトウェアバージョンのサポートが終わってしまう、新たなOSに対応できないといった環境変化への依存度が高く、いずれ何らかの対応を迫られることになります。専用の開発プラットフォームであるため、専任の技術者を確保せざるを得ず、仕組みの硬直化によって新たな環境への対応も遅れてしまう懸念も。市場の変化に追随していくことに多くの時間とコストが必要になり、ビジネス的な機会損失を招く恐れもあります。「Notes」を使い続けることのリスクを、改めて認識しておく必要があるのです。



得られるメリット ●生産性向上 ●業務効率化 ●経営分析の円滑化

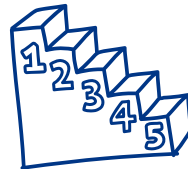
これまで各ステークホルダーに対するアプローチを見てきましたが、もうひとつNotesからの移行に踏み切れない、大きな境界線が横たわっています。それは、自分自身の中にある境界線です。Notesからの移行に確信が持てるだけの情報がないために、なかなかその境界線を越えることができない方も少なくありません。次ページでは、自分自身の中にある境界線と、それを越えるために知っておくべき情報についてご紹介します。

移行を検討している 自分自身に対するアプローチ



自分自身

新たな環境に移行したいものの、移行に関する課題や対処法、プロジェクトの規模や予算など、現実的な**移行プロセスが理解できておらず、なかなか踏み出せない。**



具体的な移行プロセスやマイグレーションレベルの提示などを自分で理解することがまずは重要。
第一歩を踏み出すための**無償アセスメントを行ってみる**のがお勧め。



「Notes」の移行に関わるステークホルダーは、実は他にも存在しています。それは自分自身に他なりません。普段から「Notes」を運用している中で、時代に適したコミュニケーション基盤に移行したいと思っはいるものの、サイボウズで現状の機能を踏襲できるのか、ブラックボックス化した現場のカスタムアプリケーションを同じように再現できるのか、半信半疑の方もいらっしゃるはず。

自分自身が納得するためには、移行に向けたプロセスをきちんと理解したうえで、どのように進めれば機能やデータの移行が行えるのかを知る必要があります。具体的な進め方がイメージできれば、現状の業務を改めて整理し、機能のフィット&ギャップを実施したうえで既存データの取り扱いについて検討していくというステップを踏んでいくことができるのです。

1 現状の「Notes」の分析 (利用機能・利用目的など)

2 移行後のベースとなる製品の理解・検討

3 移行後の製品・機能選定と現状の「Notes」とのフィット&ギャップ

4 データ移行対象の選定

5 機能・データ移行設計

検討・実施の
順序

1 現状の
「Notes」の分析
(利用機能・利用目的など)

まずは現状の運用を把握することから始めます。現場では基本機能以外にも独自に構築されたカスタムアプリケーションが存在しているため、Notes DBにどんな形でデータが格納されているのかを理解する必要があります。そのために、現場で「Notes」がどう利用されているのか、詳しくヒアリングを実施します。また、それが本当に「Notes」でなければ具現化できないのか、その目的についても理解を深めていくことが重要です。

2 移行後の
ベースとなる
製品の理解・検討

次に、新たに移行する製品の特性を把握し、どんな環境が適切なのかを検討していきます。開発プラットフォームである「Notes」は単なるパッケージ製品ではないため、そのメリット・デメリットを十分理解したうえでデメリットが解消できる環境へ移行する必要があります。機能や拡張性、実績を考慮するのはもちろんですが、カスタムアプリケーションの運用がきちんと吸収できるソリューションを選択することが最良の方法です。

3 移行後の
製品・機能選定と
現状の「Notes」との
フィット&ギャップ

移行先のプラットフォームが決まった段階で、「Notes」が持っている機能とのフィット&ギャップ分析を行っていきます。たとえば、「Notes」のスケジュール機能が新たな環境のスケジュール機能で再現できるのか、実際に利用している機能の一つずつ紐解いていくことで、フィット&ギャップが見えてきます。ギャップがある場合は、その機能を使う目的を改めて確認したうえで、どのように移行していくのかを検討していきます。

4 データ
移行対象の選定

どのデータを新たな環境に移行すべきなのか、その範囲と優先順位を決めます。ファイル管理を行っているナレッジベースやメール情報など移行しなければならない情報もあれば、万一に備えて閲覧のために残しておきたい情報もあり、中には移行不要な情報など様々なものが存在しています。コストとスケジュールを考慮し、移行データの優先順位付けを行います。参照用として一定期間「Notes」内に残しておくという選択も必要です。

5 機能・データ
移行設計

移行の優先順位が決まった後には、実際の機能・データ移行の設計を行います。移行規模やマイグレーションレベルを的確に見極めながら、移行に精通したコンサルタントとともに具体的な計画を立てていきます。標準機能で吸収できない機能の開発や移行すべきデータの抽出方法を検討し、現場の利用者自ら移行することを視野に入れながら、問い合わせ窓口を含めたサポート体制作りについても検討していく必要があります。

移行に向けたレベルを知る



移行のおおよそのステップが
理解できたところで、次に知っておきたいのが
自社の状況に応じたマイグレーションレベルです。

たとえ現状の運用に課題があったとしても、新たな環境に完全移行することが最適解というわけではありません。人的リソースと投資の優先順位を勘案しながら、抱えている課題を少しでも解決していくことが求められます。このマイグレーションレベルは、既存のデータをどのように移行・利用していくのかというレベルの違いに他なりません。完全に移行できればそれに越したことはありませんが、自由度が高いがゆえに複雑な構造になりがちなNotes DBだからこそ、なかなか移行に向けた境界線を越えることが難しいものです。

サイボウズでは、お客さまの置かれている環境に応じた「Notes」のマイグレーションレベルによって、最適な移行を支援するための環境を整えています。自社にとって適したレベルはどこにあるのか検討することで、情報システム部門の体制に応じた移行プロジェクトが進められます。



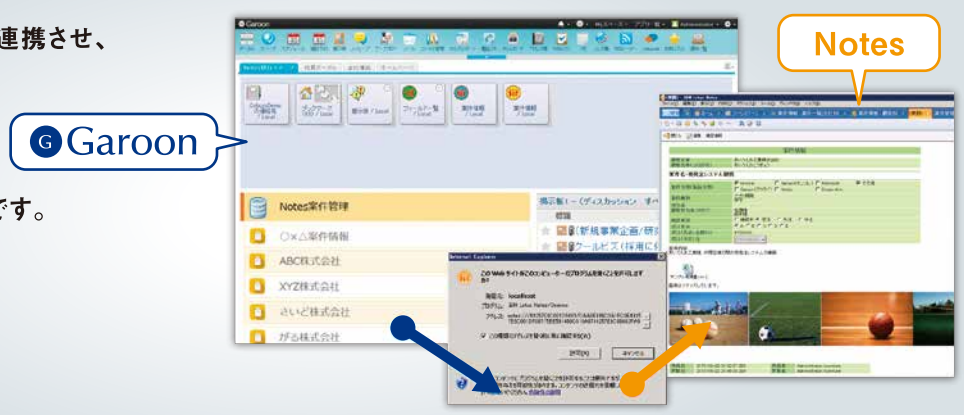
ここでいくつか具体的なマイグレーションの方法について見ていきましょう。

Lv.2 移行しない(「Notes」は参照用として利用し、保守契約は更新しない)

レベル2の「移行しない」では、「Notes」自体を参照用として置いておくものの、保守契約は更新しないというのが該当します。「Notes」内のデータにアクセスする際には、「ガルーン」のポータル上に

「Notes」内の参照用データにアクセスできるリンクを用意しておき、「Notes」クライアントを経由して情報にアクセスすることが可能です。

「ガルーン」のポータルと連携させ、最新の情報と既存の「Notes」の情報資産へシームレスにアクセスすることが可能です。

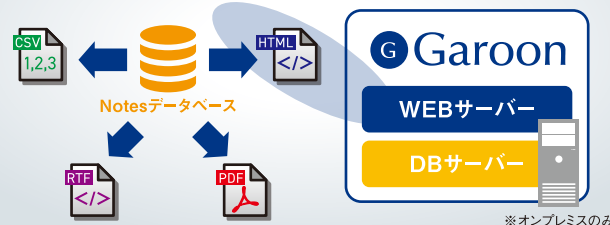


Lv.3 ファイルに出力して保存しておく(必要な時に見えるようにしておき、「Notes」クライアントは利用しない)

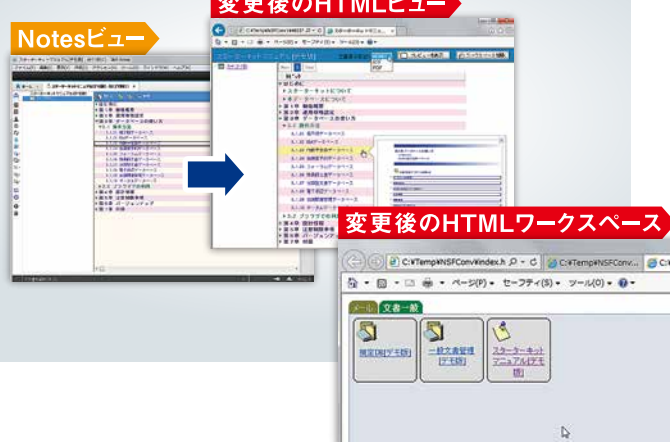
「ファイルに出力して保存しておく」というレベル3は、Notes DBを環境に依存しない形で出力し、いつでも参照できるようにしておくという方法です。たとえばNotes DBの情報をPDFやExcel形式、

リッチテキストのRFTファイル形式などに変換して保管しておきます。HTML形式で保管しておけば、従来の「Notes」に近い再現性で閲覧することが可能です。

Notesデータベースを環境に依存しないファイル形式に変換し、必要な時に閲覧することができます。



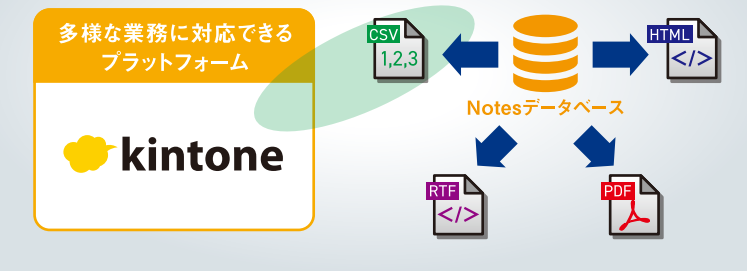
たとえば、HTMLに出力することでNotesビューの再現性を高めることができます。



Lv.4 他システム・サービスに移行して保存しておく(安価なシステム・サービスをデータの格納庫として活用する)

レベル4は、他のシステムやサービスをデータの格納庫として活用するという方法です。サイボウズでは、CSV形式で出力した「Notes」内のデータを「kintone」に取り込み、データをいつでも参照することが可能です。運用そのものは移行しませんが、必要なデータを「kintone」からいつでも確認できるようになります。

「Notes」からCSVファイル形式でデータを出力し、「kintone」へ移行することができます。



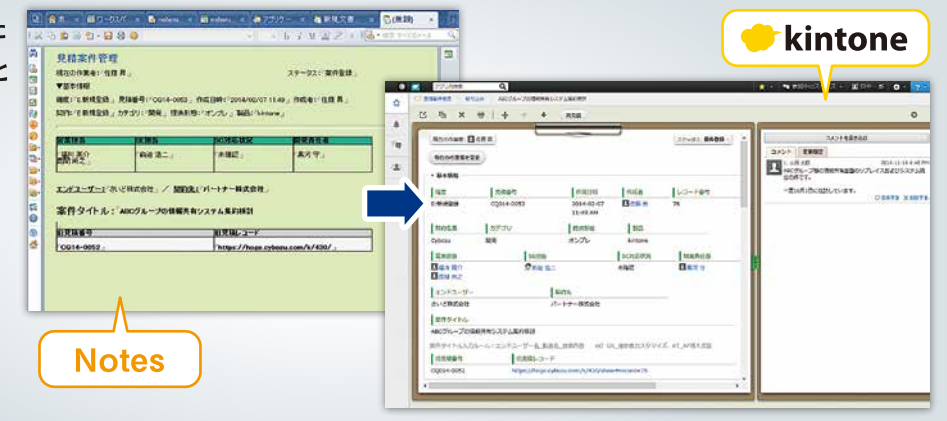
Lv.5 他システム・サービスに移行する(データを移行し運用も刷新する)

レベル5では、データを移行するだけでなく、運用そのものも「kintone」で再現し、移行していくというものに該当します。単にデータの格納庫としてだけでなく、運用基盤として「kintone」を活用するわけです。たとえば「Notes」で構築していた見積案件管理のシステムを、従来のデータも利用しながら「kintone」上で入力、管理し、いけるよう運用も新しい環境に移行していくことになります。

また、「Notes」上で掲示板の機能を利用して、

緊急フラグチェックや上司の承認によって掲示板に掲載するような運用を行っているとしましょう。この運用はそのまま「ガルーン」の標準機能では対応できません。この場合、「kintone」を利用してアプリを作成することが必要になってきます。ただし、至急用のフラグを立てて掲示板に表示するといった機能をそのまま再現するのではなく、“至急”の案内をメールタイトルに入れて相手に伝えるなど、運用でカバーするといった方法も検討したいところです。

「Notes」で開発された業務アプリケーションとCSVデータを開発・取り込むことができます。

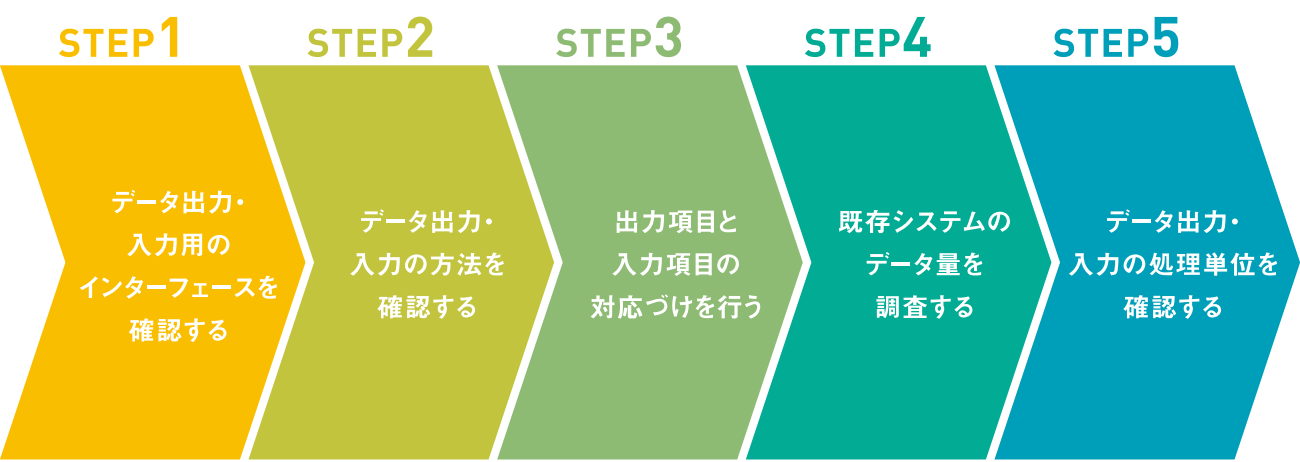


データ移行のプロセス大研究

「Notes」の移行でしっかり考えるべきは、データの移行についてです。最初に「Notes」に保管されているデータにはどんなものがあるのかを把握することが必要ですが、検討に際しては「どのデータを移行するのか」という優先順位付けを行うことでスムーズな移行が可能になります。コストやスケジュールを念頭に考えれば、移行対象から除外したり別のファイル形式に変換して参照用に残したりなど、新たなシステムには移行しないという選択肢もあるためです。

一般的に優先順位が高いのは、社外とのやり取りで利用されているメールなど個人が管理している

データです。逆に、従業員に対して一斉通達するための掲示板に残されたデータなどは、移行する必要のないデータとして判断するケースが多く見られます。ただし個人のデータについては、本当に移行が必要なのかどうかログなどを用いて調査し、客観的なデータに基づいて判断すべきです。なお、移行するデータについては、いつまで保管すべきなのかという「**保存性**」の観点だけでなく、どんな形式で誰が参照するのかという「**閲覧性**」、そしてデータの編集や再利用するのかという「**継続性**」の観点で、データの棚卸をする必要があります。



STEP1 データ出力・入力用のインターフェースを確認する

スケジュールや掲示板といった機能単位でデータの入出力インターフェースがあるかどうかを確認します。

STEP2 データ出力・入力の方法を確認する

ブラウザやクライアントソフトウェア、コマンドライン、APIによる開発など、データの入出力方法について確認します。中には手動で移行せざるを得ない部分も出てきます。

サイボウズ製品のデータ入力形式

サイボウズ製品は、データ出力・入力のインターフェースを搭載し、データ移行にも対応しやすくなっています。詳細は各製品・サービスのドキュメントをご確認ください。

	インターフェース	データの形式
ガルーン	API	SOAP
	ブラウザ経由	CSV
	コマンドライン (パッケージ版のみ)	CSV
kintone	API	JSON
	ブラウザ経由	CSV、Excel

STEP3 出力項目と入力項目の対応づけを行う

たとえば「Notes」の掲示板機能から「タイトル・作成者・本文」の情報が出力できたとしても、移行先では「作成者」が取り込めない、といった事態が発生します。そこで、出力できる項目と入力できる項目の対応づけを行います。データ形式やフォーマットが異なる場合は変換作業が必要になり、簡単なものならExcelでも可能ですが、複雑なものであれば変換用のプログラムを開発しなければなりません。

STEP4 既存システムのデータ量を調査する

移行作業の時間に大きく影響するデータ量を調査します。データ量が少なければ手動でも取り込めますが、データ量が多い場合は取り込むための専用プログラムの作成が必要な場合もあります。

STEP5 データ出力・入力の処理単位を確認する

ユーザー単位や組織単位など、データの入出力が可能な処理単位を確認します。一括で出力できない場合は、ユーザー自身にデータの出力作業を依頼することも必要になるケースがあります。

移行事例の ご紹介



- 事例企業 ① サンコール株式会社様 27
- 事例企業 ② 中野製薬株式会社様 33
- 事例企業 ③ 東洋ハイテック株式会社様 38

》》 移行事例 ①

製造業

サンコール株式会社



<http://www.suncall.co.jp/>

ご利用規模 730ユーザー ご利用製品 「クラウド版 Garoon」「kintone」

Notes移行の最適解として選ばれた Garoon+kintone 紙ベースの業務を刷新、保守の負担も軽減

自動車分野を中心に高度な精密塑性加工技術を用いた精密機能部品の開発から製造、販売までを手掛けているサンコール株式会社。長年利用してきたIBM Notes／Domino(以下、Notes)から、サイボウズが提供する中堅・大企業向けグループウェア「サイボウズ Garoon」および業務改善プラットフォーム「kintone」に移行。新たな情報共有基盤を整備している。Notes移行の経緯について、常務執行役員 業務管理部門長 杉村 和俊氏および同部門 情報企画課 飛田 朋宏氏にお話を伺った。

導入前の課題

Notesはメール機能以外 使いこなせておらず、 費用対効果が悪いと感じていた

サンコール株式会社は、自動車のエンジンに使用される弁ばねやリングギアといった各種精密機能部品、HDDサスペンションや光コネクタなど電子情報通信分野に必要な各種部品を開発製造している。世界7か国、15の海外拠点を展開するグローバル企業として、電動化分野や医療・介護分野、環境・エネルギー分野へと新規事業開拓も行っている。現在は中期経営計画「Global Growth Plan 21」に取り組んでおり、売上高500億円超、営業利益率6.5%を目指して成長分野への経営資源投入にも積極的だ。

そんな同社では、長年に渡って業務基盤としてNotesを利用していたが、メール機能以外は十分に活用しきれなかったという。「Notesは豊富な機能が備わっていますが、我々にはリッチ過ぎて使

いこなせていませんでした。Notes DBで3つほどのワークフローは運用していたものの、それ以外の申請は紙。スケジュールも使っていない人が多く、会議室予約システムも別のものを使っていた」と杉村氏は当時を振り返る。飛田氏も「このままNotesを使い続けるのは費用対効果が良くないのではないか」と感じていたという。



杉村 和俊氏

常務執行役員
業務管理部門長

そんな折、新たにNotesのバージョンアップのタイミングが訪れた。「情報をどう扱うことがビジネスに貢献するのか、情報企画課として提案を求められました。そこで、Notesをそのままバージョンアップすることを含めて、新たな情報基盤に必要な要件を検討することになったのです」と飛田氏は語る。

また杉村氏が念頭に置いていたのは、システムの内製化だった。「何かあったときにいちいち業者に頼んでいては、業務スピードが下がってしまいます。システムに修正があれば、なるべく自社内で早く対応できる環境にしたいと思っていました」と力説する。

さらに、飛田氏はサイボウズが提供するグループウェアのGaroonにも注目した。「Garoonにはメール機能やスケジュール機能があります。使い勝手を考えると、1つのポータル画面から全ての機能が利用できることが理想的ですし、1つのベンダーでソリューションが完結できる方が透過性の面でもメリットが大きい。その意味でもGaroonとkintoneの併用が最適なのではないかと考えたのです」。他にも、サイボウズが国産の製品である点も評価の1つに挙げている。「Office 365なども検討の1

つに挙がりましたが、海外のメーカーだと何かあったときに対応してもらえるかどうか不安でした。国産のGaroonであれば、使い勝手の面でも現場に浸透しやすく、何かあっても声が掛けやすい。柔軟な対応が期待できます」と杉村氏。コスト的にも折り合いがついたことで、最終的なNotesの移行先として、Garoonおよびkintoneが同社の新たな情報活用基盤として採用された。

導入前の課題

- Notesはメール機能以外、あまり使いこなせておらず費用対効果が悪いと感じていた
- Notes DBで3つほどワークフローを運用していたが、それ以外の申請は紙だった

導入の決め手

多言語対応とクラウド、kintoneと併用が可能な点を評価

今回の試みは、仕組みを再構築するプロジェクトではなく、既存のNotesで行ってきた業務を踏襲できるインフラ移行のプロジェクトにしたいという思いがあった飛田氏。「いずれはグループ全体で共有できる基盤も検討の1つに挙げていました。ただし、以前は工場の計画停電などでメールを一時的に停止せざるを得ない場面もあったため、できればクラウドにしたいと考えたのです」。

そこで、

- ①Notesの業務がそのまま移行できること
- ②海外の拠点でも利用できること(多言語対応)
- ③クラウドで使えること

を要件に、新たな情報共有基盤を検討した。同時に、紙をベースにした業務フローが社内に多く残っており、これらのフローを電子化して業務効率化する仕組みも必要だった。

そこで注目したのが、業務効率化に役立つkintoneだ。「我々の業務に適用できそうなテンプレートがkintoneに数多く用意されている点が魅力的でした。テンプレートをヒントに、活用の幅を広げていくことができると考えたのです」と飛田氏。サイボウズ株式会社がkintoneを使ってマイナンバー管理をしていたことも、高度なセキュリティ要求に対応できるkintoneを評価したポイントの1つだという。



飛田 朋宏氏

業務管理部門
情報企画課

導入効果

Garoonとkintoneを意識せず利用、クラウド化で運用負担も軽減

現状は、日本で働く社員を中心に730ほどのアカウントでGaroonおよびkintoneが利用されており、違いを意識せずにアクセスできるようになっている。

例えば、kintoneで構築されたワークフローで承認依頼が発生すると、Garoonのメールに通知が行われ、メール本文のURLをクリックするとそのままkintoneにアクセスできる。



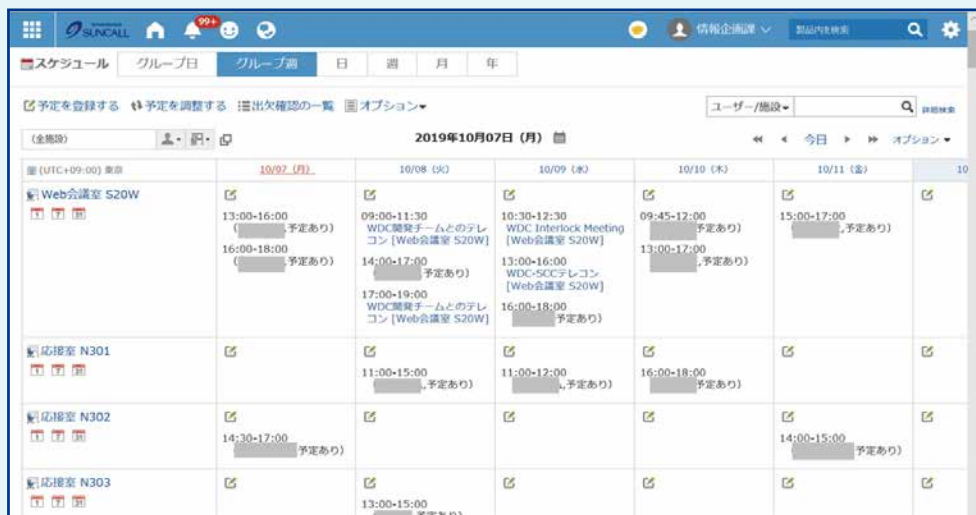
「私も含めて、Garoonとkintoneをそれぞれ意識することはありません。誰もが“サイボウズ”が動いていると思っています」とシームレスな連携について杉村氏は評価する。一部NotesDBで運

用していたフローは残っているものの、これまでNotesで行ってきたほぼすべての業務が移行済みだ。

Garoonについては、メールやスケジュール、掲示板、ワークフローといった基本機能の活用が中心だ。「これまではメールにてスケジュールを調整し、別の会議室予約システムで施設予約を行っていました。今は会議室予約とスケジュール調整が

同時にできるようになり、一元化されて便利です」と杉村氏。掲示板については、各部署が全社に通知したい情報が掲示されており、人事異動など社報をはじめ、食堂のメニュー変更のお知らせなどさまざまな情報が一斉通知されている。

スケジュール機能では、会議室予約とスケジュール調整が同時にできる。

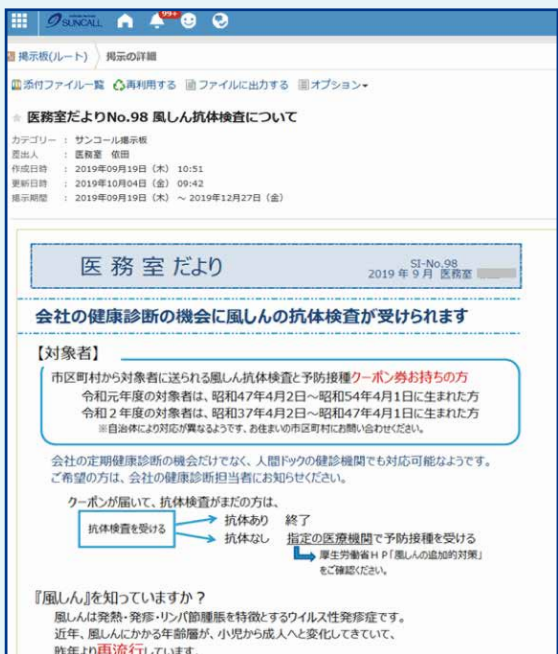


ワークフロー機能を利用し、以前は紙で運用されていた業務の電子化が進んでいる。



Garoonとkintone双方にワークフロー機能があるが、議事録の確認といったシンプルなフローであればGaroonにて実装し、複雑なフローや勘定系に関わる部分はkintoneを活用するといった使い分けだ。移行プロジェクトはJBCC株式会社 京都支店が担当。クラウド環境に移行したことで、これまでオンプレミスで運用管理の手間がかかっていた部分が解消され、保守メンテナンスに関する負担やプレッシャーが軽減できたと飛田氏は評価する。また、現状は役員など一部に限られるものの、モバイル環境にも手軽にアクセスできるようになったという。「以前のNotesと比べると、同じ環境が社外

でも利用できるため使い勝手は上々です。デバイスを選ばず利用できるのはありがたい」と杉村氏は評価する。飛田氏も「対応しているブラウザの種類やバージョンが豊富で、幅広い環境で利用できる点が魅力的です。従来はクライアント環境が変わるたびにチェックが必要でしたが、今はブラウザだけで対応できるため管理側の負担も軽減できます」と力説する。なおサイボウズ株式会社については、「導入後も現場の要望に対して開発へのエスカレーションも行うなど、真摯に対応いただいています」と、ユーザーの声に誠実に応える姿勢を高く評価している。



掲示板機能を利用し、各部署が全社に通知したい情報を掲示。予約投稿や掲示期間の指定も可能。

ワークフローについては、接待を受ける際に上長から許可をもらうための接待申請をGaroonによって行っている。「以前は個別に申請の仕組みを運用していましたが、今回一本化できたことでシンプルになりました」と杉村氏。以前NotesDBにて構築されていた品質情報の共有アプリはkintoneに移行済みだ。営業が受けた顧客からのクレーム情報をkintoneに入力し、品質保証の部門担当者がフォローする形で円滑な顧客対応が実現できている。また、紙で運用されていた業務の効率化として旅費精算アプリが一部稼働し始めており、月末に旅費精算を行ったうえで上長や経理部門の承認を得て銀行振り込みが行われている。

導入後の効果

- kintone と Garoon で申請業務を行うことで、紙ベースの業務を刷新
- クラウド環境に移行したことで、運用管理や保守メンテナンスの負担が軽減

今後の展望

活用に向けた啓蒙活動と 組織変革の契機になると期待

今後については、まずはGaroonとkintoneをしっかりと根付かせていくための啓蒙活動を続けながら、杉村氏の念頭にある内製化に向けた取り組みも加速させていきたい考えだ。また、品質情報の共有アプリの海外拠点やkintoneによる連結決算情報の収集など、既存業務への拡張も展開していく予定となっている。

「メールとExcelを利用している業務をサイボウズの基盤で行うなど、情報収集用のポータルとしても活用していきたい」と飛田氏。例えば夜勤で働く工場の人向けに行っている紙での業務の申し送りを、サイボウズの基盤で行えるようにしたいという。他に

も、コメント機能を利用して1つの情報に対して意見が出せるコミュニケーションツールとしての可能性についても期待しているという。

特に新たな基盤を整備したことで、情報企画部門の存在価値も変わってくると杉村氏は見ている。「単なるシステムのお守りではなく、情報どう扱うのか企画して、企業価値を高めるためにどう貢献するかという性格の部署に変わりつつあります」。今回のNotes移行を、組織変革の契機にしたいと杉村氏に語っていただいた。



》》 移行事例 ②

頭髮化粧品及び医薬部外品の製造・販売

中野製薬株式会社様



<http://www.nakano-seiyaku.co.jp/>

ご利用規模 270ユーザー ご利用製品 「Garoon on cybozu.com」「kintone on cybozu.com」

14年使った「Notes」のリプレイスに成功 ～モバイル活用とコスト削減を実現～

中野製薬株式会社は、美容室向けの頭髮化粧品及び医薬部外品の製造・販売を行っている。特にスタイリングワックスを代表とするスタイリング料には定評がある。美容室のプロデュースにも力を入れており、サロン経営のセミナーや、スタイリング技術を競う美容師向けのイベントの主催なども開催している。

そんな同社の情報共有に十数年利用されてきた「Notes」を、サイボウズのクラウドサービス「Garoon on cybozu.com」と「kintone on cybozu.com」に移行した。十数年ぶりの移行の決断は、どのように下されたのだろうか。「システムによる『働きやすさの提供』と『時間の創造』がSIチームのミッション」と語る、営業支援統括本部 管理本部 SI 松山一顕氏にお話をうかがった。



写真上:システムヘアケアブランド
写真下:人気のヘアスタイリング料
「ナカノヘアスタイリングタントN
ワックスシリーズ」

導入前の課題

モバイルから活用できる、 時代にあったグループウェアを

中野製薬では、14年間社内の情報共有に「Notes」を利用してきた。離れた拠点の社員との情報共有や電子決裁など、日々の業務に密着したシステムとして活用されてきたが、ビジネス環境の変化や社員からの要望により柔軟に対応できるシステムを求めて、グループウェアを見直すことになった。

「十数年前に『Notes』を導入したのですが、その頃とはグループウェアの市場も変わっています。外出の多い営業マンなどから、パソコン以外の端末からも社内の情報にアクセスしたいという声

が上がったことや、社長より『Notes』が今のビジネスシーンにとって最適なのかという問題提起をいただいたことが、新たなグループウェアを検討するきっかけになりました。」

同社の社員の中で、営業マンの比率は高い。全国の美容サロンがお客様とあって、営業拠点のある関西と関東以外のエリアには、1～2週間出張が続くということもある。このような背景もあり、新たなグループウェア選定は急速に普及の進む「スマートフォンからアクセスできること」が第一条件となった。

導入の経緯

「kintone」のワークフローアプリと 基幹システムの連携が選定のポイント

「検討の段階では、他社のグループウェアもいくつか見ました。国産のソフトウェアはそれぞれ個性がありますが、サイボウズが決め手になったのは、『kintone』の存在が大きかったです。スケジュール、掲示板、メールなど社内の情報共有に必要な機能は、『Garoon』の標準機能だけで十分満足できるものでした。ただ、決められた機能だけではどうしても社員の要望に応えきれません。『kintone』なら、標準で搭載されているアプリケーションを補って、社員の利便性を向上させることができると思いました。」

中でも、業務に合わせたシステムが求められていたのが、ワークフローだった。たとえば、経費精算では、営業マンが登録し、上長の承認が下りた申請に対して、経理が勘定項目を入力。その内容が、基幹システムに自動的に登録されるという仕組みを「Notes」で構築していた。

システム連携によって営業マンが「Notes」に登録し、そのNotesデータを元に経理が基幹システムへというように二重登録を削減することで、作業の軽減はもちろん、誤入力も防げていた。

そのため、新しいグループウェアを選定するときにも、基幹システムとの連携は外せない要件となっていた。そこで、ワークフローは業務に合わせて柔軟なアプリケーションを作成できる「kintone」で構築した。二重登録の削減の仕組みは、株式会社アプレッソが提供するデータ連携ソフトウェア「DataSpider」を利用した。

「DataSpider」を使うことで、開発コストを抑えながら「kintone」で作ったプロセス管理のアプリケーションと、既存システムのAS400とを連携することができた。

「Notes」をリプレイスするソリューションとしては、「Garoon」と「kintone」が最適だという結論が出てから、最終的には「Notes」の運用とのコスト比較を行った。オンプレミス型の「Notes」とクラウドサービスの「Garoon」と「kintone」では、単純なライセンスコストの比較では「Garoon」/「kintone」が高くなる。しかしながら、アプリ作成の内製化や、クラウド活用により削減できるハードウェアやバージョンアップにかかるコスト、これまで導入できていなかったモバイルからのアクセスを想定した場合の試算などでは、「Notes」を使い続けるよりも、「Garoon」と「kintone」にコストメリットがあることがわかった。



松山 一顕氏

営業支援統括本部
管理本部 SI

導入効果

「Notes」のリプレイスに成功し、 利便性が向上

「DataSpider」による基幹システムとの連携ソリューションの開発、松山氏による「kintone」アプリの作成や、各事業所で開催した社員向けの説明会を経て、「Garoon」と「kintone」の運用が始まった。稼働後1ヶ月間は、移行期間として「Notes」と「Garoon」/「kintone」を併用したが、それ以降「Notes」の利用は停止した。「Notes」のデータは必要なときだけ、特定の端末から閲覧できるようになっている。

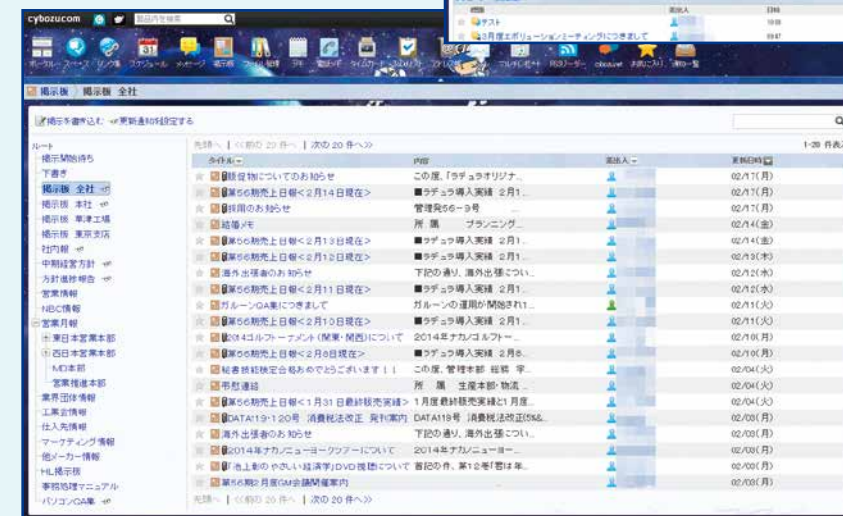
「『Garoon』は1画面に情報が集約されているので、わかりやすくなったと思います。スムーズな乗り換えにもわかりやすさは有効でした。また、

『Notes』のスケジュールは使いづらい部分があったのであまり使われていなかったのですが、『Garoon』のスケジュール管理はよく利用されています。」

また、管理者の立場でも、クラウド環境になったことによるメリットは大きい。「Garoon」と「kintone」の場合は、ブラウザ経由でアクセスするため、専用のクライアントソフトのインストールが不要。これまで、クライアントソフトの設定にかかっていた時間も大幅に削減できた。また、サーバーマシンの稼働状況やバックアップの確認、障害対応も不要になった。

「Garoon」のポータル画面

スケジュールの確認や、自分宛での通知を一画面で確認することができる。



「Garoon」の掲示板

拠点や部署ごとにカテゴリーを分け、必要な人に必要な情報が届くようになっている。

今後の展望

内製化のメリットを活かし、さらなる業務効率の向上に取り組みたい

これまで、「Notes」で行っていた業務を滞りなく移行することを優先してきた中野製薬だが、これからは新しい機能も積極的に活用することを検討している。

「『Garoon』の機能ではスペースをもっと有効に使いたいですね。導入前から便利なことは分かっていたので、複数部署のメンバーが関わるプロジェクトで有効に活用していきたいと考えています。」

「『kintone』のアプリなら、外注コストがかかりませんし、アプリ作成にかかる時間もそれほど多くないのでコストメリットが十分に見込めます。ワークフロー以外にも、部署ごとや個人ごとに管理しているExcelのデータを、『kintone』でうまく活用できれば便利だろうと思います。各部署にヒアリングをしながら、取り組みを進めたいと考えています。」

「kintone」についても、現状は「Notes」で使っていたワークフローから「kintone」のアプリへの移行が完了した段階。次のフェーズとして、「Notes」時代には外注費がネックとなり、諦めざるを得なかった紙の申請書の更なる電子化に取り組みたいという。

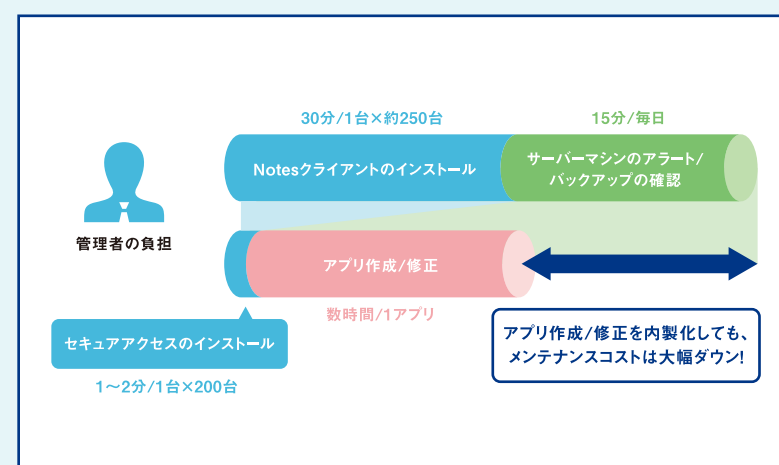
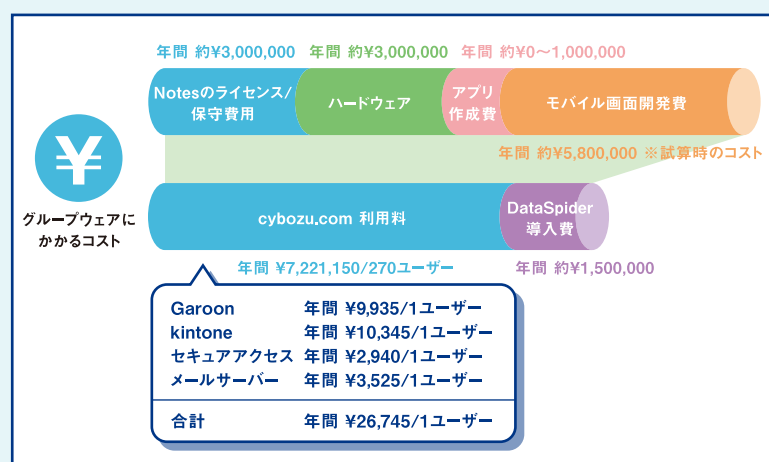
電子化が実現できれば社員の利便性は確実に向上すると知りつつも、これまでは費用対効果が見合わないと判断されていた紙の申請書が多く残っている。



外出中は、スマートフォン専用アプリケーション「KUNAI」を使ってグループウェアにアクセスしている。



以前の運用では、アプリケーションの開発をアウトソースしており、一回数十万円～数百万円にも及ぶ外注費がかかっていた。コストがネックとなり、新しいデータベースの開発や改修が思うように行えないということもあった。



以前は、社内にサーバーマシンを置くオンプレミス型の運用を行っていたため、アラートやバックアップの確認は毎日行わなければならない。さらに、クライアント・サーバー型のシステムだったため、クライアントマシンの入れ替えやバージョンアップ時には、1台30分程の作業時間を掛けて、専用クライアントをセットアップする必要があった。

操作性の向上だけではなく、社員からは、パソコンと個人の携帯電話、スマートフォンと、様々な端末からグループウェアにアクセスできるようになったことが非常に便利だという声が上がっているという。

今までスマートフォンを含む“ケータイ”からは、社内メールしか見られなかった。「Garoon」に移行してからは、掲示板やスケジュールなど、必要な情報を網羅できるようになったため、隙間時間を有効に活用できている。

>>> 移行事例 ③

プラント・エンジニアリング

東洋ハイテック株式会社様


<http://www.toyohi.co.jp/>

ご利用規模 150ユーザー ご利用製品 「Garoon on cybozu.com」「kintone on cybozu.com」

「Garoon」+「kintone」で 15年利用のNotesマイグレーションを実現 ～クラウド化で運用負担をほぼゼロに～

日本国内、そして、中国にもビジネス拠点を展開し、粉粒体プラントエンジニアリング、粉体機器の開発・販売およびリユース事業を行っている東洋ハイテック株式会社。（以下、東洋ハイテック）。同社では、グループウェアの運用管理の負担軽減を図るとともに、また24時間安心して使えるシステムを確立することを目的に、15年にわたって使い続けてきた「Notes」から脱却。クラウド基盤の「Garoon on cybozu.com」と「kintone」（以下、「Garoon」+「kintone」）へ移行した。Notesマイグレーションを経て、現在の運用状況について同社の情報システム管理者にお話を伺った。

導入前の課題

システムのレスポンス低下や障害発生で “業務が止まってしまう”問題が頻発

東洋ハイテックでは、約15年前に社内ネットワークおよび拠点間接続を構築した。それにとともに、グループウェアとして「Notes」を導入し、情報共有に活用。「社内メール」に加えて、「掲示板」、さらにそのテンプレートからの派生で作成した「日報」を主に利用していた。全社員が日常業務に活用し、使い勝手の面では特に不満は出ていなかったものの、長年使い込む中で、バージョンアップやシステムの複雑化などにともなうレスポンス低下が目立つようになってきた。毎日アクセスするからこそ、少しのレスポンスの遅れといえども、その積み重ねが大きなストレスになっていた。さらに、大きな問題となっていたのが「システム運用の負担」だ。サーバーを社内運用しており、しかも、1人の管理者だけで担当していたため、トラブル発生時や、システムが停止してしまうと、たとえ休日だったとしても対応を行う必

要があった。もちろん、このこと自体も課題ではあったのだが、何より、そのような運用体制ではどうしても対応に一定以上の時間がかかってしまい、その間、ユーザーの業務が停止してしまうという問題を解決したかった。

「情報システム担当の業務はグループウェアの障害対応やメンテナンスだけではないので、できるかぎり運用管理の負担を減らしたいと考えていましたが、それ以上に“24時間使えるシステムにしたい”という思いも大きかったです。また、すでに拠点を設置している中国も含めて、海外での事業展開にも柔軟に対応できるようにしておくためには、インターネットVPN接続が最善だともいえないでしょう。そこで、“いつでも”“シームレスに”アクセスできるグループウェア環境を求めていたわけです。」

製品選定と導入の流れ

「Garoon」+「kintone」なら、 「Notes」で構築していた 業務アプリの受け皿となりうる。

こうした課題を解決すべく、同社ではまず、ホスティング/ハウジングサービスを利用してサーバーを外へ出す、あるいは、運用そのものをアウトソーシングするといった手段を検討したが、それではレスポンス面が改善されない可能性も高いため、選択肢としては消えた。また、管理者の立場としては、そろそろ「Notes」からの脱却を検討すべきではないか」との思いもあったと語る。ユーザーがより扱いやすく、快適に使うことができるグループウェアがあれば、そちらへ移行すべきではないかと数年前から考えていた。

そうした状況の中、2010年11月開催の展示会「ITpro EXPO 2010」で目に留まったのが、サイボウズのブースだった。実際にデモンストレーションを見たり、試用してみたことで、移行先の選択肢として検討してもいいのではないかと考えたのだ。ただ、その際に懸念されたのが、自社のビジネス環境に合わせて構築してきた「日報」などの業務アプリをどうするかということである。

一方で、別に考慮すべきこととして浮上したのが、ほかならぬ「クラウド」だ。2011年の東日本大震災を受け、BCPの観点から社内で議論を行った際、災害などの予期せぬ出来事が生じたときにも業務を継続できるようにしておくためには、いつでもどこからでも利用できるクラウド上のサービスがよいのではないかと。また、データを社内で保持するという形態よりは、信頼できるプロバイダー/ベンダーに委ねたほうが、バックアップやセキュリティという見地からも望ましいのではないという考えも生じていた。

そこでクラウド型グループウェアの導入検討を始め、いくつかのクラウド型グループウェアを候補に挙げて比較していたが、最終的に決め手となったのは、業務アプリを容易に素早く構築できる「Garoon」+「kintone」の登場だったという。

業務 アプリケーション 一覧画面

営業・総務関連の業務など幅広い業務に活用されている「kintone」



Part 1

移行決定前プロセス

Part 2

移行事例のご紹介

営業日報画面

活動報告に関係者からは意見やアドバイスが集まり、スピーディーにコミュニケーションができる仕組み。



そして、これは「Garoon」+「kintone」を「扱う」という点でも同様のことが言える。まず、「Notes」で作成していた業務ごとの日報や見積台帳といった20程度の業務アプリは、ほぼそのままのかたちで自ら「Garoon」+「kintone」へ移行させたが、特に苦勞する点などはなかった。特に、「kintone」はグラフィカルなインターフェース

で、あらかじめ用意されているパーツをドラッグ&ドロップするだけでフォーム設計が可能のため、作業は短期間で完了。しかも、プログラミングの知識などがなくてもアプリケーションを作成可能なことがわかったため、今後は一般社員が必要に応じて作成するケースも大いにありえるだろうと考えている。

「簡単にデータベースが作れるということでしたから、実際に『Garoon』+『kintone』のデモを見せていただきました。そこで、弊社の日報も容易に構築できるのではないかと感じ、サイボウズをメインで考えていこうという流れに。もちろん、グループ

ウェア自体の比較検討も行いましたが、サイボウズはグループウェアにおける国内シェアがトップだという点で、社内で導入提案を通す際にも“安心感”を与えられ、実際試用期間でも使い勝手の面で経営層から好感触を得られました。」

導入効果

運用管理は「何もしなくてよく」、業務アプリ作成も「短時間で簡単に行える」。

「Garoon」+「kintone」導入後は、クラウドサービスならではのメリットを享受しており、運用管理については最初に若干の設定変更が生じた以外は「ほとんど何もしておらず、トラブルなどもない」という。さらに、従来の環境ではどうしても運用管理

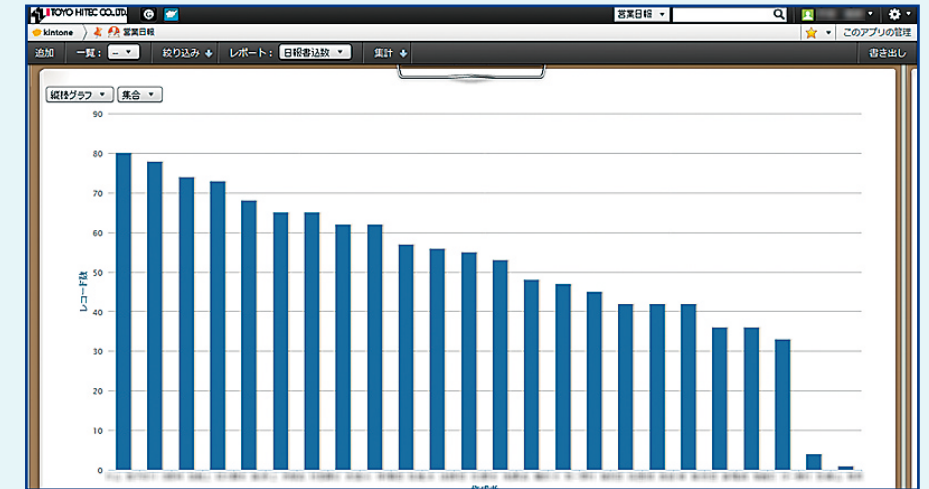
が属人化してしまいがちで、別の担当者に引き継ぐといったことは難しかったが、現在では、管理画面の簡単な説明さえすればいいため、ほかの誰かに任せるといったことも可能だと感じている。

見積台帳画面

顧客ごとの見積、粗利金額が確認できる。

見積番号	営業担当	お客様名	名称	見積金額	粗利率 (%)	履歴
TYH-14	田中 勤	サイボウズ工業	〇〇製造設備			表示する
TYH-13	大久保 直人	株式会社才望子	△△ライン移設・増設			表示する
TYH-12	福本 健	坊主総合研究所	××設備	21,000,000	38.1	表示する
TYH-11	宇多田 寿々花	株式会社ガルーン	□□設備改造			表示する
TYH-10	宇多田 寿々花	いろはにほへと九州	◆◆プロジェクト	178,900,000	25.38	表示する
TYH-9	福山 健五郎	あいうえお食品	▼▼反応装置			表示する
TYH-8	長瀬 紗希	いろはにほへと九州	制御ソフトABC	400,000	37.5	表示する
TYH-7	田中 勤	あいうえお食品	■ ■輸送設備	39,400,000	16.75	表示する
TYH-6	大久保 直人	株式会社才望子	水廻機オフィス移転	79,383,600		表示する
TYH-5	福本 健	株式会社才望子	水廻機オフィス移転	450,000		表示する
TYH-4	内山 葉々美	いろはにほへと九州	ABC設備	1,870,000	34.7	表示する

必要項目を入力するだけでグラフ表示することができる。



「特によいと感じているのは、アプリケーションやレコード単位だけでなく、フィールドに対してアクセス権が設定できる点ですね。フィールド単位でロール(役職)などの条件を細かく指定可能なので、たとえば、管理者が閲覧のチェックだけ行えばいい場合には、ほかのフィールドは編集不可に

して、閲覧済みのチェックボックスだけ設けてあげれば、操作ミスなども防げる。そうした制御は便利ですし、すごく使いやすいと思います。あとは、レポート集計が見やすい。データの羅列だけではなく、簡単にグラフを表示させられるので、BI的に、視覚的に訴えるレポートを出力可能ですよね。」

ファイル管理画面

申請書類の雛形を管理。フォルダごとにアクセス権限設定が可能。

タイトル	ファイル名	更新者	更新日時	サイズ
運転日報	運転日報.xls	田中 勤	02/24(金)	46 KB
休日出勤簿	休日出勤簿.doc	田中 勤	02/24(金)	30 KB
勤怠に関する届出書	勤怠に関する届出書.doc	田中 勤	02/24(金)	46 KB
機密保持誓約書	機密保持誓約書(2009.07.22).doc	田中 勤	02/24(金)	26 KB
給与振込依頼書	給与振込依頼書.doc	田中 勤	02/24(金)	37 KB
給与振込依頼書	給与振込依頼書.doc	田中 勤	02/24(金)	33 KB
クリーニング依頼管理表	クリーニング依頼管理表.xls	田中 勤	02/24(金)	21 KB
機密通知書(大沢)手書用	機密通知書(大沢)手書用.doc	田中 勤	02/24(金)	30 KB
研修参加報告書-原紙10/31.doc	研修参加報告書-原紙10/31.doc	田中 勤	02/24(金)	35 KB
研修参加報告書-原紙	研修参加報告書-原紙10/31.doc	田中 勤	02/24(金)	40 KB
経費支出申請書	経費支出申請書.doc	田中 勤	02/24(金)	45 KB
国家資格等取得届	国家資格等取得届.xls	田中 勤	02/24(金)	16 KB
小口借入金申込書	小口借入金申込書.doc	田中 勤	02/24(金)	430 KB
信用証	信用証.doc	田中 勤	02/24(金)	31 KB
請求書	請求書.doc	田中 勤	02/24(金)	36 KB
支払請求申請書	支払請求申請書.xls	田中 勤	02/24(金)	21 KB
社外委託書(使用)10/31.doc	社外委託書(使用)10/31.doc	田中 勤	02/24(金)	37 KB

今後の展望

「スペース」活用や
スマートデバイス連携で、
さらに業務の効率化を図っていきたい。

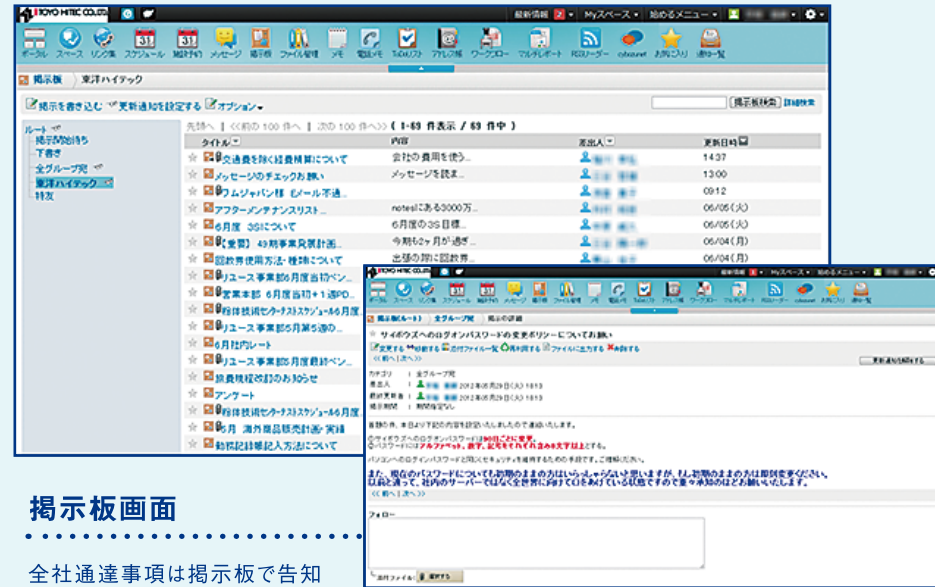
今回の導入は全社規模で実施したため、中国現地法人の日本人社員、そして、中国人社員も含めて、同じ土壌での情報共有が可能になった。これまでメールでの連絡のみであった状況が、中国語にも対応している「Garoon」+「kintone」上でコミュニケーションがとれるようになり、連絡や相談のスピード化につながっている。

「『Garoon』+『kintone』へ移行してから2カ月が経過しましたが、現在、活発に利用されている機能は、スケジュールやワークフローそして、「スペース」です。特に「スペース」は、横断的に使えるという点で社長が高く評価しています。経営情報などが含まれるものは別ですが、部門単位、あるいは各部門から抜粋したメンバーで進めるプロジェクトなどは、可能な限り、オープンなかたちでスペースを使っています。このグループはこういう活動をしている、このプロジェクトはこうに動いているというのが、ほかの社員からも見えるというのが大事じゃないかということです。」

また、今回のグループウェアのリプレイスをきっかけに、スマートフォンの本格導入に関しても、検討を始めることになった。現在は個人レベルでの活用にとどまっているが、社長を筆頭に、ユーザーの間では「スマートフォン経由で使えるようになった」ことへの評価は非常に高い。

「いちいちPCを開く必要もなく、どこでも営業日報などを見られるし、承認なども行える。これはすごく楽し、簡単なフォーム入力なら電車の中でもできますからね。とはいえ、じゃあ、メインとして使えるかというと、やはりPCが必要な場面も多いですし、使い分けるといことになるかと思います。ただ、『kintone』のスマートフォン向けアプリが利用できるようになると、スマートフォンの用途もより広げられるかもしれませんから、大いに期待しています。」

今回のリプレイスでグループウェアをクラウド環境へ移行させたことで、運用管理の負担が大幅に軽減。しかも、使いやすく見やすい“スケジュール”や、多様なビジネスシーンに対応する“スペース”などにより、全社員が多くの機能を積極的に活用し始めている。そしてもちろん、既存の「Notes」環境で最も重要だった、自社のビジネスフローに合わせた業務アプリ構築という役割も、「kintone」を導入したことでしっかりと維持されているため、結論としてNotesマイグレーションには「Garoon」+「kintone」が非常に有効だと感じているという。東洋ハイテックでは、今回の新たな情報共有/業務基盤の構築を礎に、今後も業務効率を高める取り組みを続けていくつもりだ。

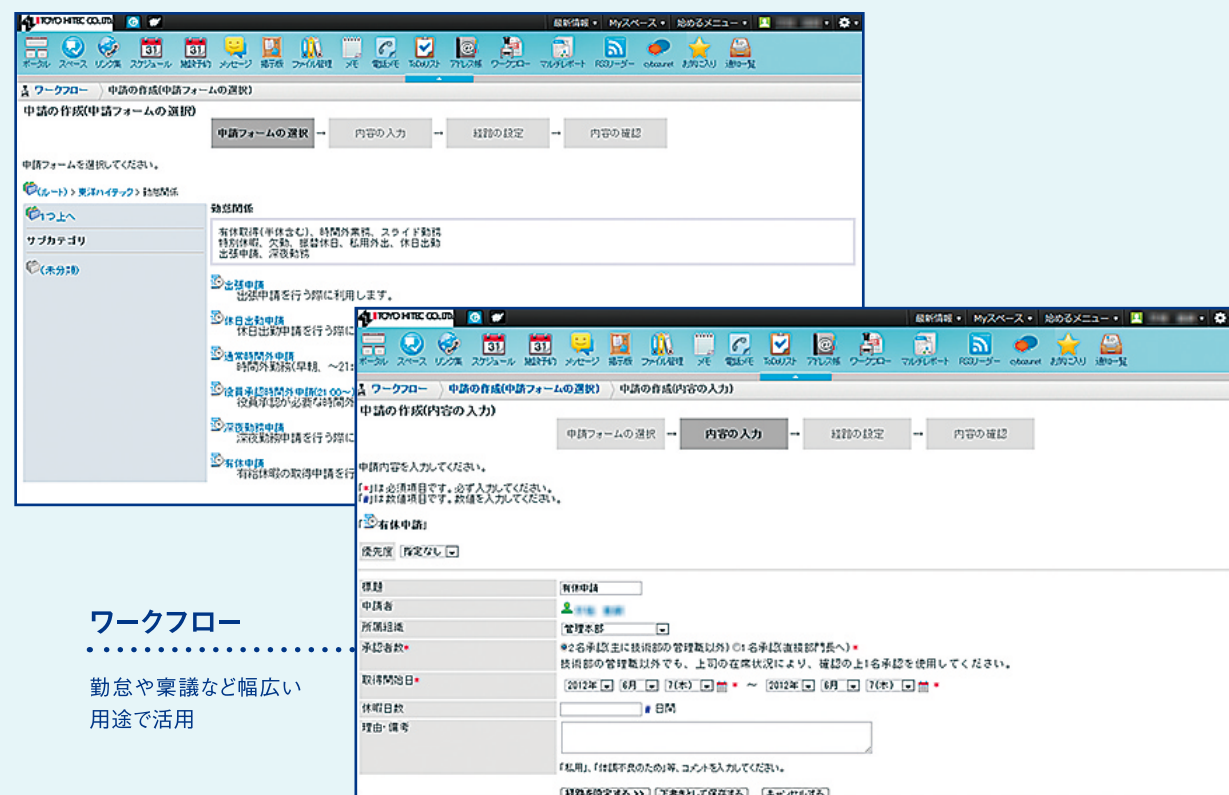


掲示板画面

全社通達事項は掲示板で告知

コストについては、「Garoon」+「kintone」を150ユーザーで利用しているため、月額料金は27万円程度となるが、管理面での作業負担/費用がほとんど必要なくなり、しかも、24時間止まらないということを鑑みれば、妥当な金額だと語る。

「オンプレミスとのコスト比較に関してはいろいろな見方があるでしょうが、弊社の場合は同じようなことを実現するために必要な“（運用管理の）人件費”だけでも、27万円では済まないと考えました。しかも、クラウド版ならハードウェアのリプレイスやバージョンアップ費用なども不要ですから。」



ワークフロー

勤怠や稟議など幅広い用途で活用